

妊婦とその家族の相互行為の分析

川島 理恵 (日本学術振興会 特別研究員/埼玉大学)

赤ちゃんを迎える、それは家族にとって大きな変化を経験することでもあります。家族メンバーは、それぞれの立場から胎児と関わり、その変化を経験します。しかし、その関わり方はそれぞれ違います。例えば、妊婦はある時期から胎児の胎動を感じ、その存在に直接触れるようになります。またキョウダイとなる子供が母親の妊娠をきっかけに、赤ちゃん帰りをするといったことがあつたりします。また胎児の存在は、超音波装置などの医療器械を使う以外、通常目にする事のないもの、いわゆる見えない存在です。その見えないけれど存在している胎児がその場の相互行為に参加する。それが家族メンバーにとってどういう関係性を生み出すのか。特に妊婦とその子供の相互行為を分析の焦点とし、その相互行為に胎児がどのように参与しているのか、その参与の形をいくつかお話ししたいと思います。

今回の分析に使用したデータは、CCI プロジェクトのものです。京都大学赤ちゃん研究員のご協力を得て、月1回の縦断的なデータコレクションを行い、家庭での自然な相互行為を定期的に撮影しました。主な参加者は妊娠7から9ヶ月目の母親とその家族、(子供や父親)です。子供の年齢は2才から4才です。今回の分析には5つの家族の12回分の撮影データを使用しました。

分析手法としては、会話分析を使用しました。この手法は、相互行為の手続きを詳細に記述するツールとして有用で、今回の焦点となる家族の相互行為パターンの記述には最適であると考えます。

「胎児へ話しかける」こと：

相互行為上「話しかける」という行為は

- = 相手に聞き手としての参与役割を与える
- = 聞き手は次の話し手としての役割を与えられる
- = 応答する必要性を生じさせる・
- = 可能な反応を限定する：適切な応答の範囲を定める

これらのことにつながります。

胎児に話しかけるということはこういった相互行為上の手続きを胎児に要求すること、すなわち胎児を参

与者として仮定した相互行為では、胎児にもその応答必要性・可能性が生じることになります。

「見えない存在」である胎児が参与役割を割り当てられるということは、他の参加者の参与枠組み、応答に関する責任が複雑化することにもつながります。(話し手—聞き手という単純な構造に、unseenかつvoicelessな参加者が加わり、参与枠組みが重層化するのです。結果としてだれが次の話し手か、胎児なのか自分なのか、次にどういう応答が必要とされているのか、その応答はだれが担うべきものなのか、など、参加者はかなり複雑な相互行為を扱わなければならないのです。

今回の分析から2つの胎児の参与役割の形が明らかになりました。

1. 直接的にその場の相互行為の参加者と扱われる場合、この場合胎児は次の話し手としての応答必要性を負います。そしてその場にいる参加者が代弁する、reported speech (報告発話) をする必要が生じます。

例：妊娠9ヶ月の母親と3才の兄、父親の3人の会話

母：赤ちゃんに聞いてみ、京阪乗ろって

兄：「一緒に京阪乗ろ」

母：「なんて？」

母：「何ていった赤ちゃん。」

兄：「のゆって」



ここでは、誘うという第一成分と胎児がその誘いを受けたことをリポートするという行為が同じ担い手、子供によってなされるという複雑な相互行為が生じています。この事例では、胎児にたいして応答する役割が割り当てられていると同時に、子供に応答を報告する必要性が生じています。すなわちこの入れ子型の構造をもった発話行為が適切であるという文脈がその場で作られているのです。

2. もう一つは胎児を将来的な参加者として参照する場合です。この場合、胎児には応答必要性は生じません。しかし、他の参加者がその場の相互行為においてなにかしらの応答を返さなければならないことになります。

例：妊娠9ヶ月の母親と2才9ヶ月の姉（外で三輪車に乗って遊んでいる場面）

母：「教え上げてな、こうやって乗るんやでって」

姉：「...」

母：「おもちゃ貸したげんねやろ」

この「教え上げてな」という指示によって、子供には「教える」という行為を行うことが求められています。そしてその教える相手、聞き手として想定されているのが、胎児です。ここでは胎児に対しては応答必要性が生じていませんが、子供は母親からの指示になにかしらの応答を返す必要があります。指示には、それを受ける、受諾もしくは受けない、拒否という応答が可能です。応答として「いいよ」「いやだ」というだけでなく、求められている行為、ここでは「教える」ことを実行に移す必要もあります。しかし、この「教える」行為が時間的な枠組みの中で、いつなされるべきか、今この場で行うべき行為か、近い将来行うべきものなのか、この指示に対してどうかえすべきか、応答に関するこれらのことは、母親の発話では限定されていません。この場合、アンビバレントな母親からの発話に対して、子供がどういった反応をするかによって、胎児のステイタスが定義・再定義されることになります。

この例では、子供は母親の発話に対して明らかな応答はすぐ出している訳ではありません。この応答の不在は、子供の拒否、教える事を拒否していることを示している可能性があります。これに対して母親は「おもちゃ貸したげんねやろ」という質問に言い換えることで、子供からの応答をより限定しています。

結論

今回の分析では、ほとんどのケースで、母親が胎児を含める相互行為を開始していました。母親が主導して相互行為を開始し、それにより生じた相互行為上の応答必要性の複雑さを、参加者がそれぞれの立場で処理していました。すなわち母親がその場の相互行為への胎児の参与役割を決定することが多いということです。また母子間相互行為では、母親が乳児に相互行為上のエージェンシーを肩代わりすることがあること、これも母親が主導で胎児の発話を仮定したり、代弁することを促したりすることと相似していると思います。妊娠期のこのような相互行為の構造は、乳児期の母子間相互行為への precursor(前駆)的な存在と言えるのかもしれませんが。